

粕谷和夫の観察日記より。河口湖に多数いて目立ったキンクロハジロというカモです。盛んに潜水し餌をとっていました。写真はペアでくつろいでいるショットです。真っ黒な上面と白い腹のコントラストがしっかりしている方がオスです。オスの後頭から延びる冠羽がトレードマークです。黄色い虹彩の目は少しきつく感じます。

紅葉台



新聞

第126号

2024年
4月20日

発行人：関谷 孝

粕谷会長の観察日記



日野市・浅川にコサギの小集団とダイサギ1羽が集まって、ともに魚を狙っていました。この写真で嘴が黄色で大きい1羽がダイサギ、嘴が黒で小さいサギがコサギです。両者が一緒にいると大きさの違いが良く分かります。コサギには繁殖期を迎え2本のポニーテールのような飾り羽が見えます。



3月11日、春日部市の古利根川の堤防を歩きました。東武東上線の北春日部駅から一ノ割駅の区間です。カムリカイツブリが夏羽に変わっていました。

♥ 頭上の黒い飾り羽がとても立派です。冬羽は、顔から首が白くなっています。

山にある延暦寺」をさします。当時は京都が中心ですから「富士山」をさすものではありません。

次に「川(かは)」と言えば「賀茂川」をさしました。特に「川原(河原)」と言った場合には賀茂川の「四条河原」をさすことが多いようです。ちなみに「山川」は「やまかは」と読んだ場合と「やまがは」と読む場合では意味が違います。「やまかは」は、「山と川」であり、「やまがは」は「山にある川。山あいを流れる川」の意になります。

それから「祭り」と言えば、「賀茂神社の祭礼」のことを言います。『全訳古語辞典』(第5版・旺文社)で調べてみましょう。①・②と二つの説明があって、その②に「特に、京都の賀茂神社の祭礼のこと。陰暦四月の、中の酉の日に行われた。葵祭り。」と説明してあります。

「葵祭り」ともありますが、この説明では「賀茂神社の祭礼」が何故「葵祭り」とも言うのかわかりません。そこで別の辞書『詳説古語辞典』(三省堂)を引いてみましょう。やはり②番目の語釈になりますが、「京都の賀茂神社の祭礼。陰暦四月の中の酉の日に行い、装飾に葵を用いるので、葵祭りともいった(傍線、筆者)」とあります。「詳説」と銘打っているだけあって、やや詳しい説明になっていて、これでようやく「葵祭り」とも言うわけがわかります。

普通名詞が特定の固有名詞をさす言葉の話でしたが、いつのまにか「古語辞典」の比較になってしまいました。ついでに『全訳読解古語辞典』(第5版・三省堂)を引いてみます。「とくに、京都の賀茂神社で、陰暦四月の、中の酉の日に行われる祭礼。衣冠・牛車(ぎっしゃ)・栈敷の簾(すだれ)などを葵で飾ることから葵祭ともいう(傍線、同上)」。

【問題】 □ 次の例文の下線部「遊び」とは、何の「遊び」でしょうか。適当なものを下から選んで記号で答えなさい。例文...「月のおもしろきに、夜更(ふ)くるまで遊びをぞしたまふなる」

(源氏物語・桐壺) ア、蹴鞠(けまり) イ、偏(へん) 継ぎ ウ、詩歌・管弦 エ、貝合はせ オ、囲碁・双六



図A:「全訳古語辞典・第5版」旺文社 蹴鞠



図B:「新明解古語辞典・第3版」三省堂 かひあわせ



図C:「新明解古語辞典・第3版」三省堂 すごろく

「花」と言えば「桜」か、それとも「梅」か?

関 邦義

英語で“book”と言えばもちろん「本」のことですが、ここに定冠詞がついて“the book”もしくは大文字で始まって“Book”になると「聖書」(Bible)の意味になるらしい。つまり、冠詞がつき、大文字で始まることで、普通名詞が固有名詞になるわけです。これと似たように普通名詞が特定の固有名詞をさす言葉が日本語にもあります。例えば「花」。上代では普通に「花一般」をさしましたが、それ以降平安時代の初期頃までは「梅」をさすようになったようです。さらに平安時代の中 期頃からは「花」といえば「桜」をさすことが多くなりました。

〔梅の例〕...人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香(か)ににほひける(古今・春上四二・紀貫之) ○訳: 人は、さあどうですか、心の中はわかりません。でも、昔なじみのこの里は、梅の花が以前のままの香りで咲いているのでした。○解説: 「人」は、作者(紀貫之)が奈良の長谷寺に参詣するたびに宿としていた家の主人。久しぶりに訪れた作者が家の主人に皮肉を言われたので、それに応酬して詠んだ歌。「ふるさと」も「花」も昔と同様に私(作者)を歓迎してくれる。それに対してあなた(宿の主人)は、見かけは昔と変わらないが、心の中はどんなものでしょうか、と言ったもの。〔桜の例〕...久方の光のどけき春の日にしず心なく花の散るらむ(古今・春下八四・紀友則) ○訳: 日の光がこんなにもどかな春の日に、どうして落ち着いた心もなく桜の花は散っているのだろう。○解説: のどかな春の日差しの中で、しきりに散っていく桜の花を惜しむ心を詠んだもの。

また、「山」と言った場合には「比叡山あるいは比叡

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。